
やり直す人生

工藤新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やり直す人生

【Nコード】

N3900H

【作者名】

工藤新

【あらすじ】

人生に後悔がある人が依頼人の仕事をしている女性「辰巳」とその事務所で働いている「卓真」。そんな事務所に「人生を変えたい」という依頼が来たが今回の依頼、一筋縄ではいかないようだ。第一部ここに始まる

依頼

『もし、自分の人生やり直せるとしたらどうしますか？ 悩み、後悔があれば助けます。』

僕はそんなうたい文句のサイトを見ていた。

誰しもが後悔はある。しかし、あったとしてもどうすることもできないそんなことはわかりきっている。でも、僕はその広告に載っているアドレスにメールを出してしまった。

「どうせ誰かの悪戯さ」

そんなことを思いながら僕はその日このページから抜けた。

同時刻の別の場所 とある喫茶店に二人の男女がいた。

男は女から何かを受け取ると早々に外に出て行った。女は慌ててその後を追ったが男の姿はなく消えていた。

2034年8月 今日はずっと暑い。

「あ〜っ〜い〜」

ある雑居ビルからそんな声が聞こえてくる。

「ね、どうにかなんないのこの暑さ」

「無理言わないでください。クーラーは壊れちゃったし、買い換えるお金もないんですから」

「ああ、あ、お金……転がってないかな」

そんなやり取りをする女性と青年。

女性は見た目25、6才と若く見える。しつかり出るところも出て綺麗なお姉さん系の女性だ。

一方青年のほうは20いくかいかないかぐらいで見えるからに冴えない。しかし顔立ちはいい探せばどこにでもいるような青年。

そんな二人が雑居ビルにいるのはここが事務所だからなんだけども

「なんで仕事の依頼がこないのよ」

「1ヶ月で仕事は2つですからね」

「あんなの仕事にならないでしょ。飲酒を止めるのなんかまあ依頼人は気が付かずに『今』を生きているんでしょうけど」

青年は女性の話を聞きながらパソコンをつけた。1日数回ホームページから依頼が無いかを確認するのが青年の1つの仕事。

「んっ。辰巳たつみさん仕事の依頼来てますよ?」

「読んでくれ」

「はい、『あなたが本当に助けしてくれるのなら僕を助けてみてください。』だそうです」

「? それだけか?」

「はい。これだけです」

「・・・はあ、そんなの無視しろ 無視」

「いいんですか? せっかくの仕事なのに」

「いいも何も、どこの誰でどんな悩み、後悔なのかわからないんじゃない話にならない」

「まあ、確かにそうですけど・・・」

「ほらほら、それはもういいから次の仕事をしてくれ卓真たくまくん」

その日卓真はそのメールが気になっていたけれど辰巳さんが無視しろと言っただからいいかと思いきや残りの仕事を終わらせて1日が終了した。

次の日も何も変わらず1日が過ぎるはずだった。

「辰巳さん、また昨日と同じアドレスからメールが来てるんですけど」

「昨日のメールって何だっけ？」

「ほら、誰かもわからない助けてくれってメールですよ」

「あゝあれか で、今度はなんて？」

「え〜っと、『結局助けられないんだな。大人なんかみんなそうさ嘘つきだ』」

「よし、そいつを探し出そう」

怒っている。顔は笑ってるのに怒っている。

「え〜っと、相手は僕が探しますんで辰巳さんはいろいろ準備を」

「準備って言っても相手がわからないんじゃないしな〜」

などと言いながら外に出て行った。たぶん例の情報屋の所だろうそんなことを思いながらメールが来たアドレスに返信することにする。

辰巳は事務所を出るとどこかに電話を掛けだした。

「もしもし、私だけど今からいい？」

「そう、いつものところ」

「はいはい、わかった」

電話を終えた辰巳は歩き出した。

歩いて30分ぐらいのところ、ひとりの喫茶店があり辰巳はその中に入ってしまった。

中にはマスターしか居らずガラツとしている。まあ、いつもこんな感じの店なんで辰巳はよくここを利用する。

「マスター、コーヒーお願い」

そうマスターに告げると奥のテーブル席に腰を下ろした。

マスターが持ってきたコーヒーを飲んでいると1人の男が入ってきた。不精ひげを生やし格好もラフなその男は辰巳を見つけると同じテーブル席の辰巳の正面に座りめんどくさそうに

「んで、今日は何用だ？辰巳さん」

「いや、別に用とかじゃないんだけどさ今度また仕事を頼むかもしれないかなって」

「情報の？」

「情報の。」

「まあいいけど、それで相手は？」

「それがまだ不明でさ、今卓真君が探してるのさ」

「ふうん、でお前は全てを卓真に任せて旧友とお茶ですか」

「旧友は無いんじゃない？田辺君どっちかって言うとなら共犯じゃない？」

「はははは、確かにな。旧友より共犯だ」

それから2時間ほど近況や情報のやり取りをして店をでた。

事務所に戻った辰巳は卓真から1枚の紙を渡された。

「なんだこれは？」

「先ほどの依頼人の詳細です」

紙にはこう書かれていた

『名前 木ノ瀬 竜きのせ りゅう』

年齢 17歳

住所 不明

後悔 自分が親を殺してしまったこと そして、それ以来家から出れずにいること』

などなど詳しく書いてあるが辰巳は一見しただけだった。

そして紙を机の上に放ると

「よし。今日はここまでまた明日ね。ばいばい」

「えっ、いいんですかすぐ解決しなくて？」

「大丈夫でしょ。人生は変えられない」

「はあ〜そうですけど……」

「ほら、今日は終わりだから帰った帰った」

何か納得のいかない卓真くんを追い出し少ししてから電話をかけた。
めた。

「もしもし、さっきの件だけどちょっと調べてほしい事があるの
お願いできる？」

「詳細は追って連絡入れるから『木ノ瀬 竜』って子を調べとい
て」

簡単に用件だけ言って電話を切った。

次の日辰巳はいつもの喫茶店にいた。人を待っているのだが約束
の時間を過ぎていないのにこない。

約束の10時から2時間も遅れてその男は店に入ってきた。

「遅い 2時間も遅刻なんてありえないでしょ」

「わり〜、朝は苦手だね」

などと言いつを言っていたがたぶん仕事をしていたのだろう。辰巳もそれはわかったので深くは責めない。

「それで、わかった？」

「ああ、大体な」

「3年前、買い物途中の母親が交通事故で亡くなったそう。そこに木ノ瀬竜つて子も居たんだがその子は遠くに居た母親を見つけて脅かそうとして後ろから近ずいたんだけど突然母親が誰かに押されたように車道に出たみたいなんだ。そのとき周りに居た人の1人が『こいつが押したのを見た』つて言つてその子を指差して叫んだみたいだね。そのときは気が動転しててその場から逃げちゃったんだけど周囲にいた人の何人かがその子の顔を覚えててね簡単に見つかったんだけど未成年で親族ということもあり事情聴取を行つて監視付きで日常生活には戻つただけけどその日以来家から出ようとせずに引きこもっているらしいんだが……」

気ノ瀬竜の詳しい事を聞いていたが最後の方で聞いてはいけない単語を聞いてしまった。

「『改ざん』されている可能性がある」

その言葉を聴き辰巳も心底驚いた。『改ざん』それは本来あつては

ならない、許されることではなのだが2つだけ思いつくことがある。
1番可能性が高いのは

「私が関わったってことは？」

「その辺はよく調べたが無かった」

「ってことは……」

「ああ、俺たち以外にも『居る』ってことだ」

「はあ、この仕事思った以上に厄介になりそうね」

「今回は俺もサポートするからがんばってくれよ」

「あら、お前がサポートするなんて珍しいじゃない。哲^{てつ}」

「まあ、今回はしょうがないだろ。俺はこのまま情報を集めるからお前はまだ動くなよ。いいな？」

「はいはい」

辰巳はしぶしぶそう答えた

喫茶店から出た辰巳はコンビニにより飲み物を買って事務所に戻った。

「あつ、お帰りなさい。」

卓真がそうあいさつをする。

「ああ、ただいま」

と辰巳が返す。席に着き買ってきたお茶を一口のんでから

「今は動けない。ここは哲の情報を待つしかない。」

などと考えながら次に何をするか、どう動くかを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3900h/>

やり直す人生

2010年10月15日23時14分発行